2024(令和6)年8月 17 日

宜野湾市指定史跡「野嵩スディバナビラ石畳道」文化講座

第２回講座「昔の野嵩とスディバナビラの思い出」

講　師：新垣 政幸（せいこう）氏（昭和４年 11 月３日生まれ）
松川 吉信（よしのぶ）氏（昭和６年７月 15 日生まれ）

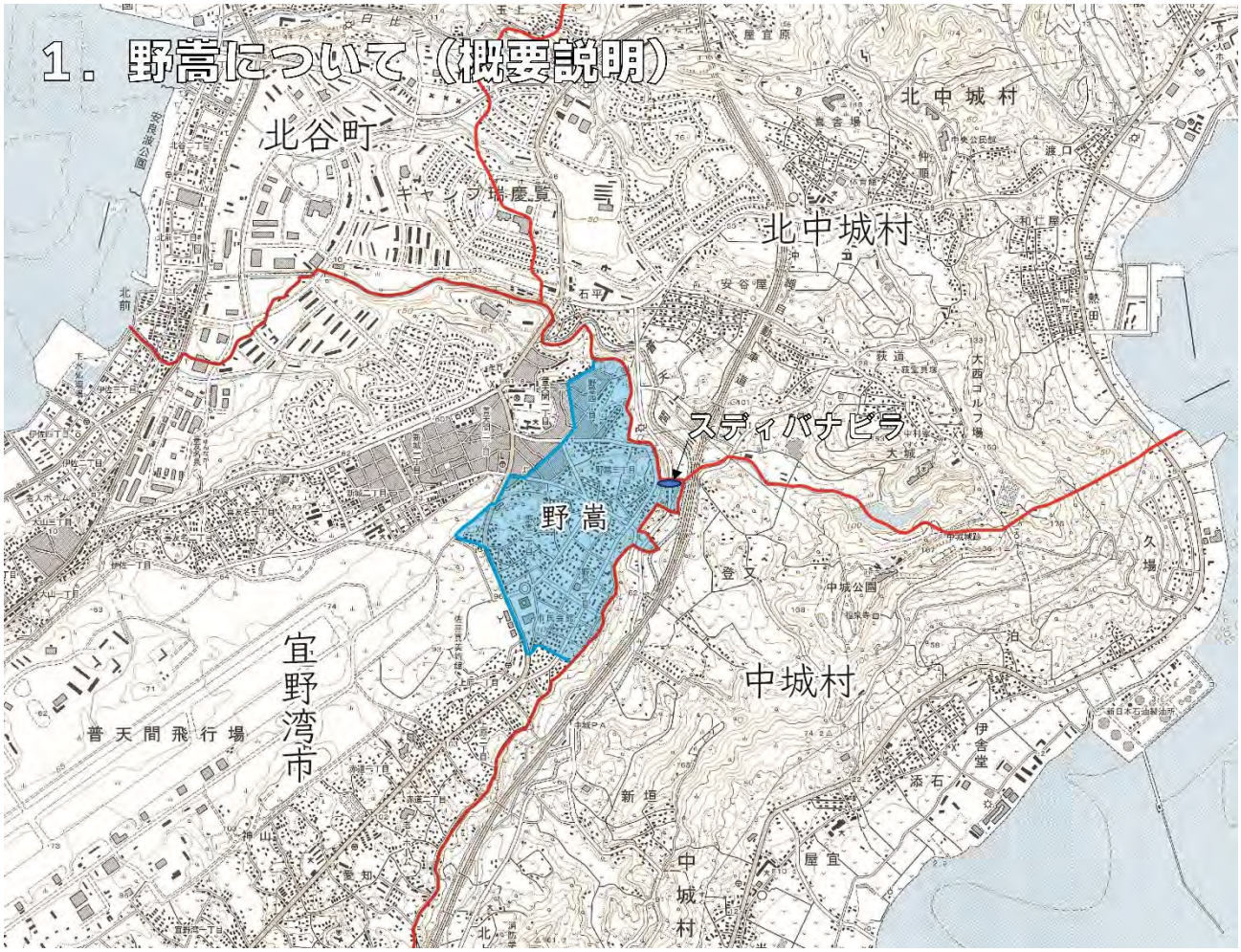
次　第

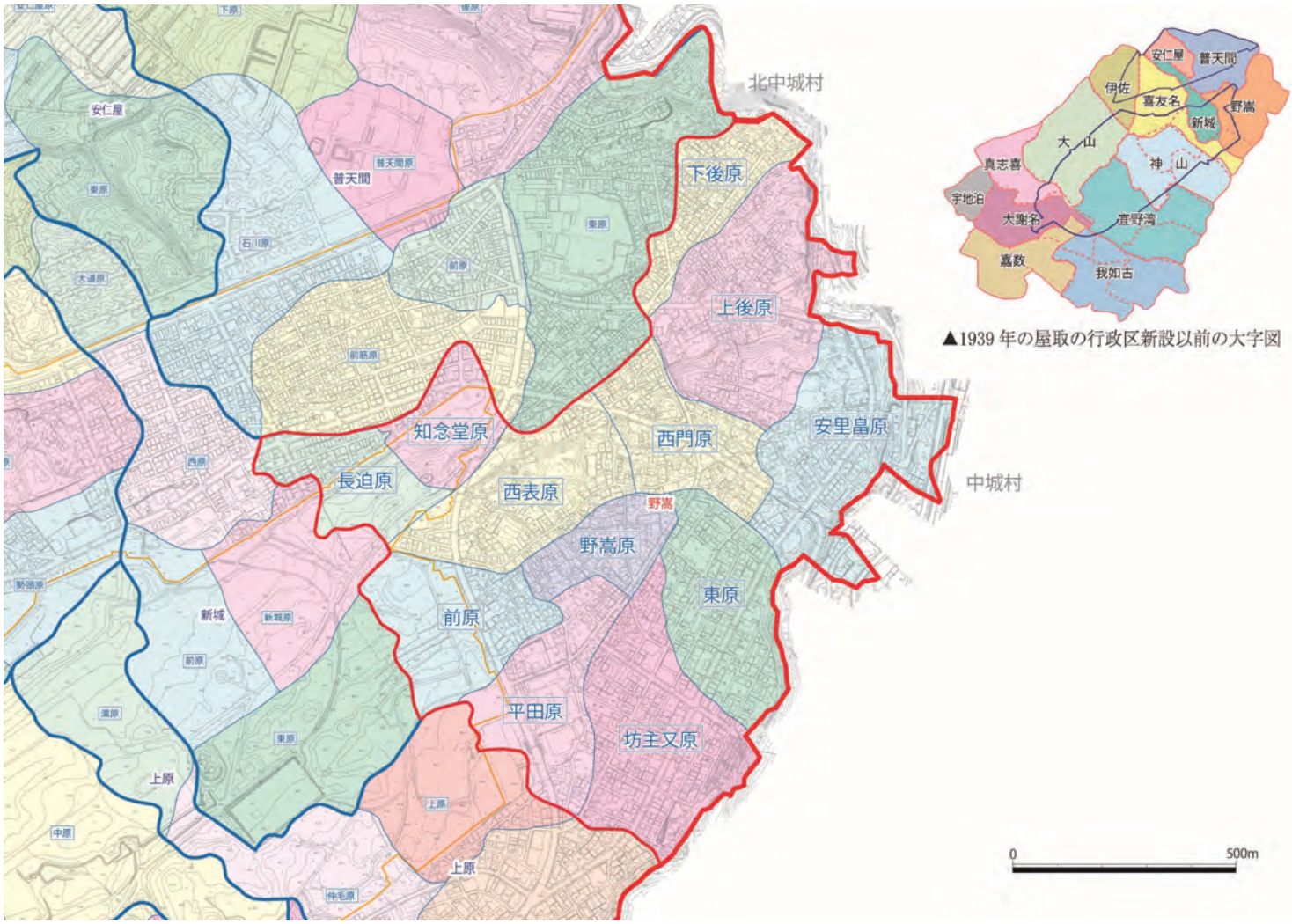
１．野嵩について（概要説明）

２．戦前の野嵩

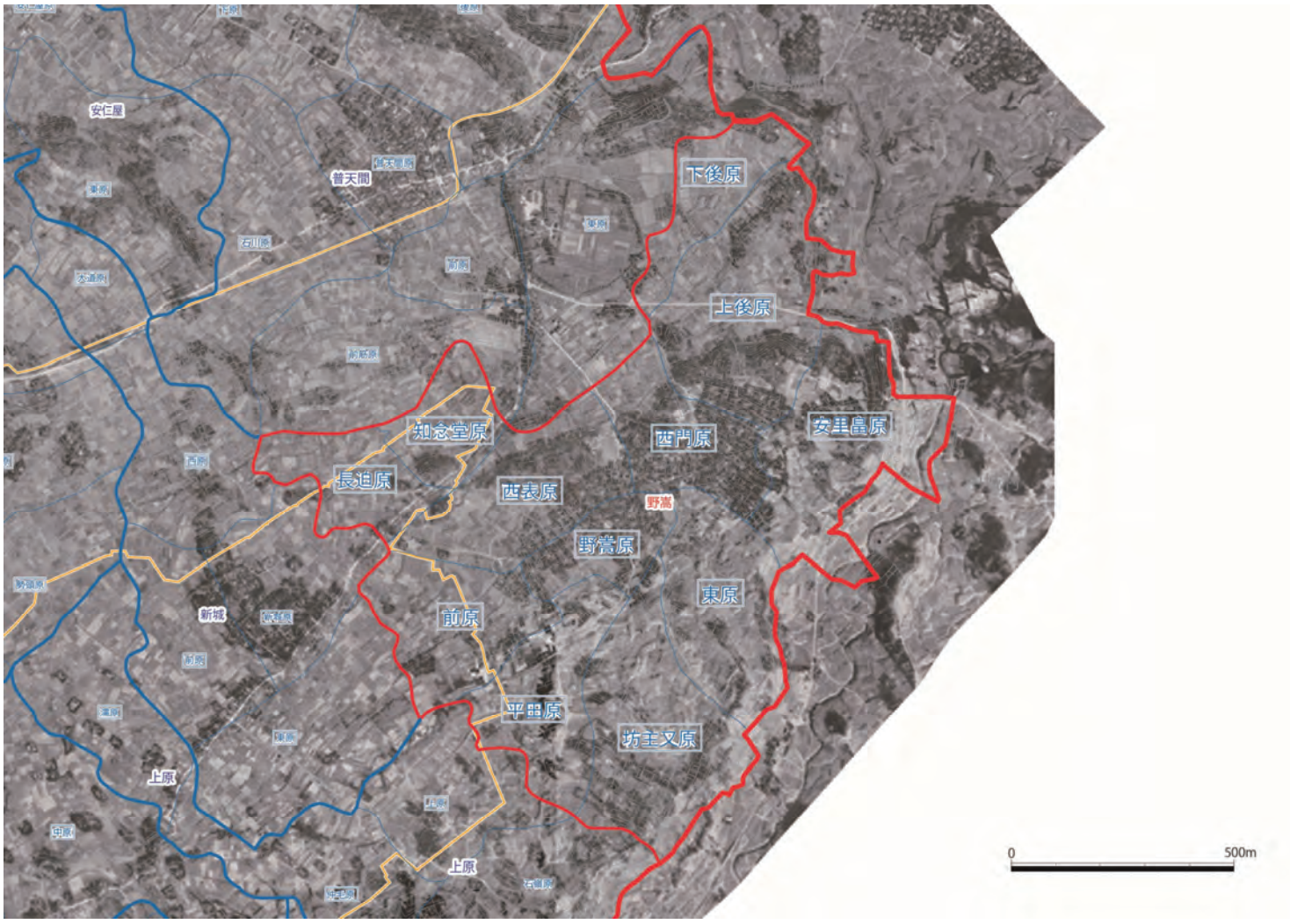
３．戦後のスディバナビラ

４．今後のスディバナビラ





▲1939 年の屋取の行政区新設以前の大字図



ピンジリの拝所
フシクブ
イーヌタキ
ミーガー跡
ターバルガマ
【現公民館】
トゥニムトゥ
地頭火の神
【現市役所】
メーヌカー
タキジョウガマ
クシヌカー
ウガンヌカタ
ウフグティー
スディバナビラ

北中城村
だけ公園
29
我謝橋
沖縄自動車道
普天間川
宜野湾市

県道東側の「スディバナビラ」
坂下から

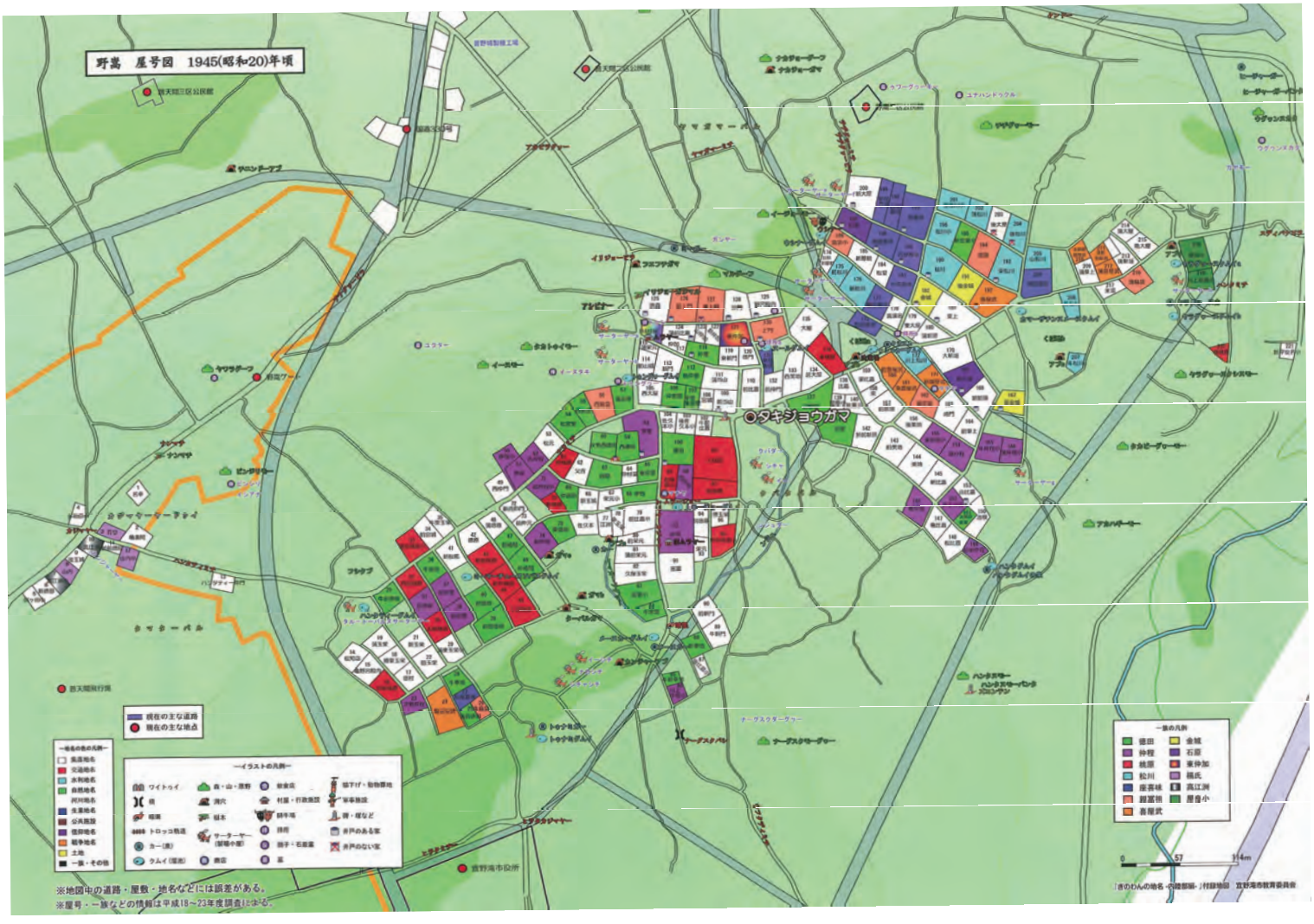
坂上（県道）から

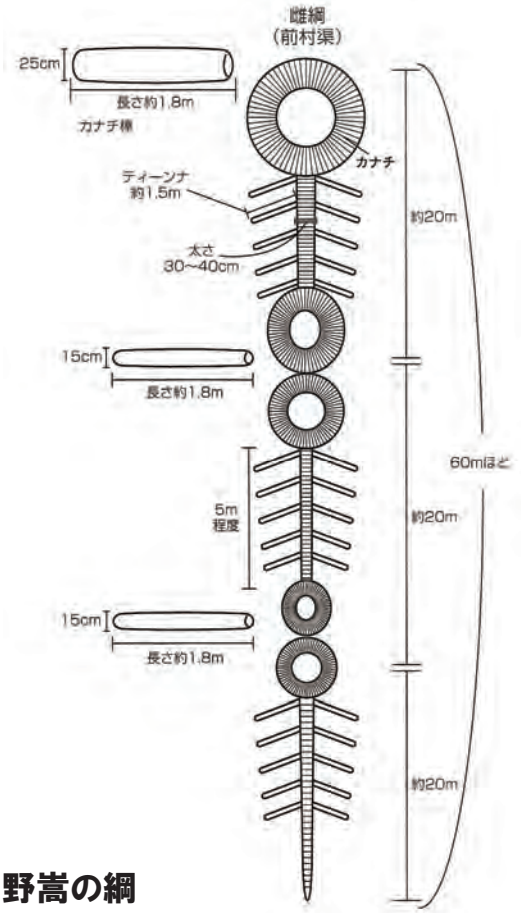
県道西側の「スディバナビラ」
坂下（県道）から

坂上から

史跡指定答申手交式
県道29号
X=31890
Y=285
TP.11
TP.06
(Tr.10)
TP.07
TP.08
TP.09
TP.10
TP.05
TP.01
TP.02
Tr.01-2
Tr.01
Tr.02
Tr.03-2
Tr.03
Sub.10
Tr.01-3
Tr.04
Tr.04-2
Tr.04-3
Tr.05
Tr.06
TP.04
Tr.08
Tr.08-2
Tr.09
Tr.07
県道側にはフェンス設置
凡例
現位置を保つ石畳検出箇所
石畳の分布範囲（一部推定）
指定範囲(案)（約60m）

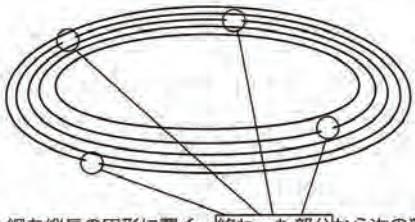
県道西側の「スティバナビラ」
（発掘調査中）


野嵩　屋号図　1945(昭和20)年頃
○タキジョウガマ
現在の主な道路
現在の主な地点
※地図中の道路・屋敷・地名などには誤差がある。
※屋号・一族などの情報は平成18～23年度調査による。
「きのわんの地名・伝説部編」付録地図　宜野湾市教育委員会



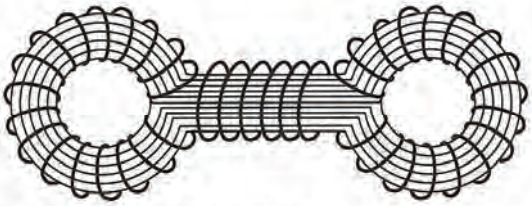
野嵩の綱

①



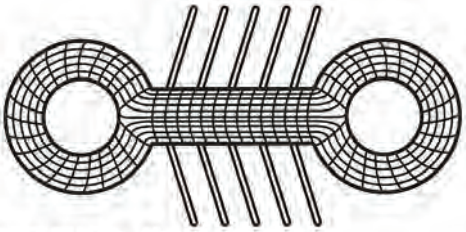
打った綱を縦長の円形に置く。終わった部分から次の新しい綱を続けて置く。これをくり返す。

②



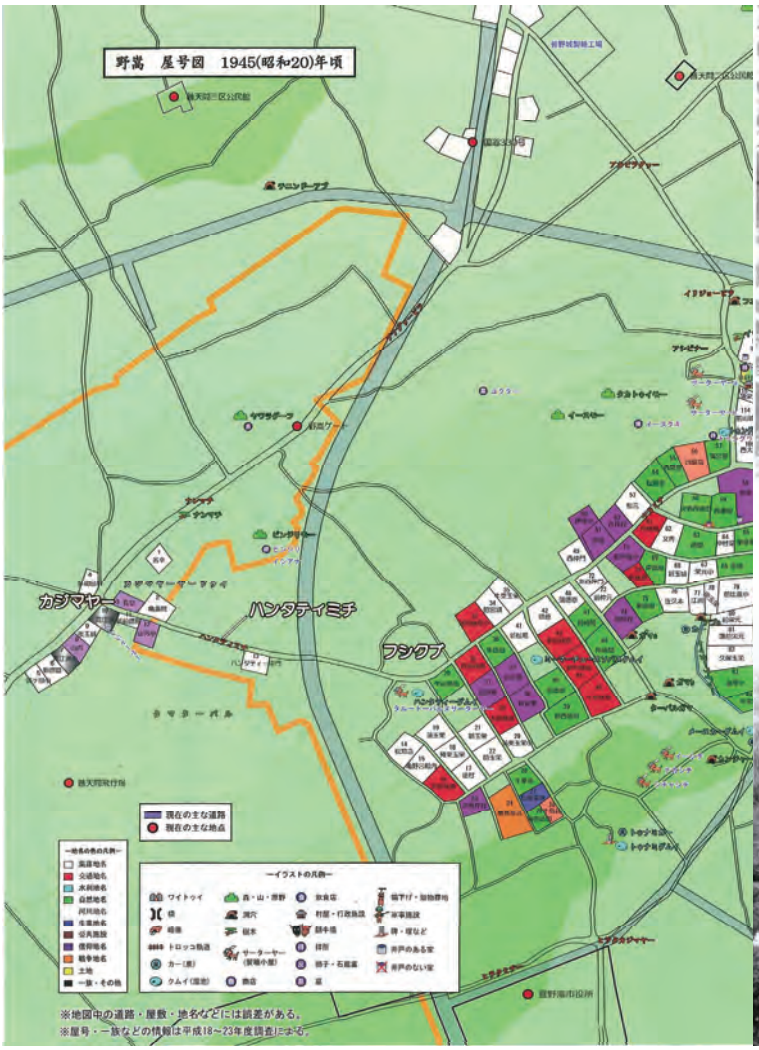
カナチの部分と胴体の部分を締めてゆく。

③



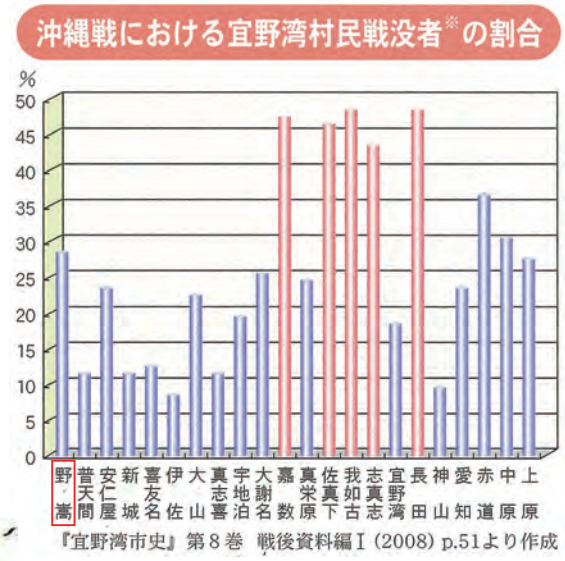
ティーンナを付けて、終了。

「ちなひちもうい」(令和5年8月13日)


野嵩　屋号図　1945(昭和20)年頃
カジマヤー
ハンタティミチ
フシクブ
現在の主な道路
現在の主な地点
※地図中の道路・屋敷・地名などには誤差がある。
※屋号・一族などの情報は平成18~23年度調査による。

↓中頭方西海道
普天間参詣道
↓(ジノーンナンマチ)
宜野湾村◉
◉普天満宮
番所道
(バンジュ道)
◉野嵩村
◉安谷屋
◎野嵩スディバナビラ石畳道
(スディバナガーラ)
◉大城村
◉中城城
西原間切
中城間切
沖縄県立博物館・美術館所蔵

野嵩慰霊之塔



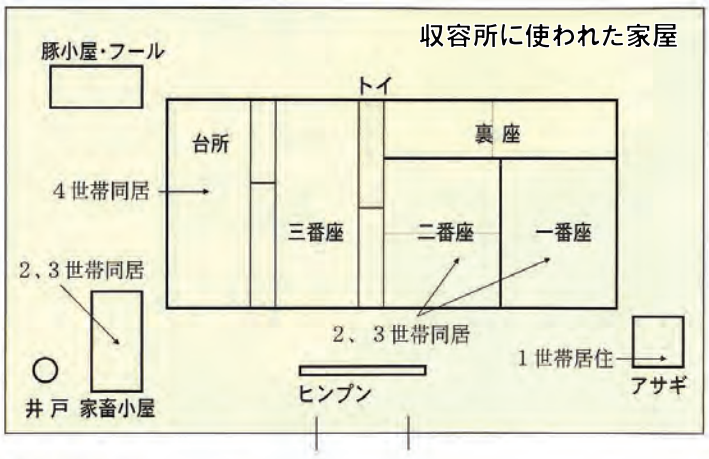
『宜野湾市史』第８巻　戦後資料編Ⅰ（2008）p.51より作成

埋没したターバルガマ（『ぎのわん市の戦跡』）

タキジョウガマがあった辺り

野嵩収容所（1945年5月）

ハウスナンバーの残るヒンプン



元MP事務所

地方行政組織にみる宜野湾の「村」の歩み（大山の事例から）

時代区分	近世琉球		近代沖縄			戦後沖縄	
	首里王府→1872←琉球藩→1879←		沖縄県	→1945←		琉球政府 →1972←沖縄県	
統治国家	琉球王国		日本国			アメリカ合衆国	日本国
年代	?～1671	1671～1897	1897～1908	1908～1945	沖縄戦	1946～1962	1962～現在
地方行政区画単位 地方行政執行機関 （所在地） 地方行政責任者	浦添間切 番所 （浦添仲間村） 地頭代	宜野湾間切 番所 （宜野湾同村） 地頭代	宜野湾間切 役場 （宜野湾同村） 間切長	宜野湾村 役場 （宜野湾同村） 村長		宜野湾村 役所 （字野嵩→字普天間） 村長	宜野湾市 役所 （字普天間→字野嵩） 市長
地方行政基本単位	謝名村 （志ゃな・大志ゃな）	謝名具志川・具志川村 大山村	大山村	字大山		字大山	1964 大山区
地方行政執行支所	村屋	村屋	村屋	字事務所		字事務所	区事務所 区公民館
地方行政担当者	村掟	村掟	村頭	字区長		区長	1964 区自治会長

▲1939 年の屋取の行政区新設以前の大字図

宜野湾の大字（土地）・行政区・

▲1939・43 年の屋取の行政区新設以降の大字区

▲1964 年以降の行政区域図

984 年以降の住居表示区域図

1977年の野嵩上空

現在の市役所周辺にあった
米海軍の通信隊施設

現在の宜野湾市役所（1980年）

＊石工（石細工;イシゼーク）

- 戦前における庶民の住生活の中に石工の職の占める比重は大きかった。
- 戦前、墓の構築は一世一代の大事業。
  墓を造って、後に屋敷を建てるのが家庭繁栄の理想とされ、
  孝の道にも沿うものとされた。
- 墓が造れるようになって初めて棟梁の資格を得た。

＊馬車ムチャー

- 人や荷物を馬車で運搬する人。
- 沖縄には明治の末期頃に入ってきたのではないか、とされる。
- 大正３年に軽便鉄道が登場した後も需要が減ることはなかった。
- 宜野湾では、昭和初期頃まで普天間を拠点として、那覇・嘉手納を走る
  軽便鉄道の大山駅との間と、普天間と泡瀬間を運行していた。

「袖離坂」
スディバナビラ」

スディバナビラ県道東側

スディバナビラ県道西側

●部分で検出された岩盤（最初の石畳？）

スディバナビラ西側のイメージ図（坂上から）

（坂下から）

3．戦後のスディバナビラ

1977年航空写真

スディバナビラ野嵩集落側入口（1994年）

スディバナビラ野嵩集落側入口（2022年）

スディバナビラ西側（1994年）

（2023年）

4．今後のスディバナビラ